

林謙一 2Bの鉛

〈著者略歴〉

明治39年東京生れ。昭和6年早稲田大学
理工学部建築学科卒業、毎日新聞社入社。
社会部記者として活躍。昭和12年内閣情
報部情報官に転じ、南方海軍治政地区の
情報活動等に当たる。敗戦後、追放をう
け以後、自由業として現在にいたる。著
書に「おはなはん」「サンドイッチ親父」
「日曜画家」などがある。

2Bの鉛筆

昭和四十九年六月三十日第一刷

著者 林 謙 一

発行者 阿部 亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話 東京 二六五一―一二一一
振替口座 東京 七八七四三番

印刷 大日本印刷
製本 中島製本

万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

2
B
の
鉛
筆

著者自装

今日も快晴だが、南西の風が強く吹きつけている。

幅広いうねりがある。べっとり湿った風だ。土用波。そのせいか、鎌倉材木座海岸には、いつもほど人は出ていない。

平常でもここは、七里ガ浜にくらべれば田舎の海水浴場である。七里ガ浜には葦簀よしず張りの脱衣小屋や、うどん、パン、ゆで小豆などの店が、夏場だけ数軒ほどは出ているのだが、材木座海岸にはそんな店はない。唯一軒の店は、鎌倉駅へ通っている円太郎馬車の引き返し点に、氷屋が、北斎の描いたような紺色の波の上に、赤く『氷』と染め抜いた小旗を潮風にはためかせているのが遠く見られるだけ。漁船と漁網と、浮木の間に、海水浴客は自分の領分を見つけて、甲羅を干している。

男は黒いランニング・シャツを下まで引き延ばしたような毛織物の海水着を身につけ、女は、ひだのある同様な黒の海水着でつましく膝のあたりまでを覆っている。模様といえるような柄ものはない。たまに、赤と白の横縞だんだら模様の海水着を着て、白いタオルをケープにして羽織っている女を見つけると、人々は、皆、銀座の女給だと思った。

昭和五年の夏。卒業を半年先に控えた早稲田大学理工学部建築学科の四人は、材木座に漁師の家の

二階を借りて合宿をしている。卒業論文を仕上げるための合宿ということだが、それは親への言いわけに過ぎない。六畳と三畳を八月ひと月十四円で借り、四人で四円ずつ出しあった。残額の二円は黒川真行が、「いくら飯盒炊さんするつたって、菜罐ぐらいはいるよ」といって、アルミ製の金色に光る大菜罐を買って抱え込んできた。

「これ、高田馬場の店で負けてもらつたんだ。本当は二円八十銭だそうさ。それを二円五十五銭にしろもらつたのさ」

「じゃお前、五十五銭は」

「俺が立て替えといたよ」

「じゃついでだ。君、会計係をやってくれよ」

ということだ、黒川が幹事みたいなことになってしまった。

あとの三人、磯田信三、石光徳雄、沼尾利正は、「自然の推移つてもんさ。黒川は金曜日がマスの日と決っている奴だから、会計も正確だろうよ」といってまかせた。

家主の鈴木さんは、「私はただの漁師じゃねえよ。私は従七位勲八等、春先にやここから小壺までの磯で、ぎんぼう漁をして御用邸にお納めしちよる」と自慢して、シベリア出兵当時の出征の話をする。四人はその話より、初めて耳にした、ぎんぼうという魚の名が面白くて、「ここんちのぎんぼうがね」とか「今朝は、ぎんぼうが四時半頃からさあ」と主人を鈴木さんとは呼ばなくなってしまうた。

黒川は、『省線大森駅の旅客流態と階段の考察』、磯田は、『パウハウス運動に就いて』、石光は、

『法隆寺東院夢殿の様式と大陸文化』という、もっともらしい卒論のテーマは決めているが、黒川が七月に大森駅へ日参して調査や実測してきたデータを抱え込んできている以外には、磯田も石光もまるで論文の格好がついておらず、沼尾に至っては、「俺は何にしようかなあ」といまだにテーマを物色している。

こんな状態だったから、合宿は雨でも降って泳げない日の暇つぶしに論文のことを考えてみる程度で、「今日は半僧坊の縁日だそうだ」、「今夜は、滑川でさ、青砥^{あおと}藤綱の真似してさ、ゼニ探しがあるって」といって跳び出していった。

今年にはいつから急角度で、世の中は不況へ落ち込んでいった。新聞は労働争議、ストライキ、一家心中の記事で埋められている。その中でも彼らの意気を阻喪^{そそう}させるものは、『失業者二百五十万人』などの新聞の大見出しや『ルンペン』という言葉である。ルンペンとは、もとはドイツ語の『ぼろ服、古着』という言葉から転化して、そのようなものを身にまといつて浮浪者、「ああ俺たちも『大学は出たけれど』、末は博士か大臣じゃなくてルンペンだ」

相次ぐ争議、共産党への弾圧、特高警察政治、山本宣治の暗殺、農民の窮乏、対米輸出の不振など国内は騒然とし、支那大陸、満洲に好餌を求める軍閥は二回にわたる山東出兵を敢えてした。

「召集が来るぞ。黒川、大丈夫か」

毎晩律義に、その日の出納を計算している黒川を囲んで、三人は半ばからかうように、半ばなぐさめるように言った。

「予備少尉殿は、つらいよ、な」

黒川は顔の半面で笑った。彼は千葉の鉄道連隊に一カ年入隊して幹部候補生の修業をすませてきていた。

「卒業は一年遅れたしな、ロクなこったあないよ。おい。それより沼ちゃん、今朝の干物、ありや十枚かい。いくらだった。立て替えてんのだろう」

沼尾は「そうだった」と、黒川の顔をのぞき込みながら、

「アレ、ぎんぼうが只でくれたよ。それよか、おとついの鯖ッ。一匹十八銭で、えーと、四匹立て替えてあるんだ」

「アノ鯖か、十八銭って高いなあ」

「そうかい。知らねえや」

沼尾は黒川から七十二銭を受けとって、制服の上衣だけを、パンツ一枚の上に羽織っているポケットの中へほうり込みながら、

「アッ、いけねえ、電報がきてたんだ、速水の奴から」

といって七十二銭と入れかわりに電報送達紙をつまみ出してきた。

「だから沼ちゃんは頼りないんだ。いつきたんだい、その電報。速水がなんだって。来るってかい」

石光は叱るようにして手を差ししのべ、沼尾から送達紙を奪いとった。

沼尾は、

「あした昼頃、来るってことよ。さつきみんなが浜へ出た後に、ぎんぼうのおかみさんが二階に持ってきて来たんだ。一人ふえるんですかってね、言いながらさ。奴、ちゃんとお読みになってから持つてきたよ」

速水健。同級生である。建築学科の一学級は三十二、三名、それが三つの専攻に分れていた。設計が十八名、構造が九名、建築設備が四名、残りの二、三名はいつも出席簿では名を呼ばれているが、ついぞ顔を見せたこともなく、その専攻が何なのかも、誰も知らない。

速水健は設計専攻グループの中でも、スタイリストで高踏的な学生である。石光が四国の中学から、黒川が水戸の出身と、地方出の多い同級生の中で、数少ない東京の府立中学からストリートに來たというエリート意識と、地方出の学生が一樣に持っているおせっかいで排他的な同族意識の強い風潮を蔑視していた。東京生れの東京育ちのエリート意識は、団体行動を極度に嫌った。「あいつら田舎者と一緒にされてたまるか」という自意識が過剰のせいだ。だから、この春、新学期が始まると間もなく磯田から鎌倉合宿の勧誘を受けたときも、「合宿なんか書けやしないよ。泳ぎになら行くよ。二晩や三晩は泊めてくれるだろうな」といって仲間にはいることを断わっている。その速水が明日昼、やってくる。

翌日は土用波もおさまり、焼けつくような快晴だった。裏山の蟬の声がうるさく、風が東寄りに交っていた。海岸は朝から賑わっている。

速水がこの三月、電車化されたばかりの横須賀線にゆられて鎌倉駅に着いたのは正午過ぎだった。駅前の仕出屋兼食堂『いそみ』で昼食を済ませ、小さな幟旗に『材木座海岸ゆき』と書いて馭者台につきさしてある乗合馬車に乗り込んだ。片側四人の定員八名。その八名の定員さえ満たないままに、走り出した。乾き切っている泥道に轍をきしませ、砂ぼこりをあげて走り出した。

材木座海岸終点の水屋で、速水は、氷水一杯で咽喉をうるおしてから、漁師鈴木太市宅を訪ね当てた時は、四人は居なかった。ぎんぼうのおかみは、「浜へ行ったよ。待ってたって、ちよつくらちよつと帰ってくるもんじゃねえよ。あんたも泳いで来なさったら」と言い捨てて、そそくさと出かけてしまった。後は、無人で開けっ放しだ。

速水は、栄養不良な茄子畑を横切って、台所口から屋内にはいった。足元を真赤な、大きな弁慶蟹が走った。二階は、石光のもの、沼尾のものと一見してすぐわかる制服や制帽、持物などが散乱している。奥の六畳の間の中央に色褪せた花梨の机があり、その上に便箋が表紙を開けたまままで置かれ、アテナ・インキの瓶が文鎮のように乗っている。インキ瓶はしなびた薄紅色の朝顔を一輪、編笠のようにかぶって、俺を見ろよ、という顔をしている。便箋には、黒川の手で、『健ちゃん着いたら浜へ来いよ。オレたちは、家のすぐ下で泳いでいる』

裸足でとび出してきたのを後悔した。焼け砂のあつさに参った。浜芝や踏み抜かれたように捨てられている舟底板伝いに、速水は走った。渚の湿った砂地まで爪立てて走って、ひといきついた。

ああいいなあ、潮の香、波の音。ホット・ケーキを裏返すような、波の打ち返す響。沖には鷗が群れている。そのあたりに、赤い旗が立って、ブイがいくつか浮いている。その上に石光たちが甲羅を干しているように見える。砂浜は相当に賑わっているが、四人を探し出すのに困るほどではない。広い材木座の浜に、ほんだわらと一緒に海から打ち上げられてこがっている人間どもは、せいぜい二、三百人だ。由比ガ浜に比べれば、閑散としたものである。

速水は、早く仲間を探したかったが、それよりも、一刻も早く水の中に飛び込みたかった。速水は水を蹴立てて飛び込んでいった。心地よい冷たさが全身を包んだ。一年ぶりの快感、去年は三浦御崎で泳いだ。今年は、あいつらのお陰で、鎌倉へ来たか。波頭をふた峰ほど越えたと、浮いている頭の数はいくらになってきた。爪立てれば背の立つ深さだが、もうそのあたりになると幾人も泳いでいない。ブイに上っている人々の顔、形がようやく識別できるところまできたが、黒川たちではない。

潮流が由比ガ浜のほうから流れている。速水は、遠くへ流されるのを怖れて流れに逆らって泳いだ。お得意の右手抜きノシだ。海岸線と並行して滑川の川口に向っている。浜から沖へ一列に何本か赤い旗が立っているところを横切った。速水は、海水浴の指定区域から危険な禁止区域へ出たな、と思った。もうそのあたりには泳いでいる者はいない。引き返そうとしたとき、無人のブイを見つけた。禁止区域にブイがある。変だなと思ったが、少々疲れてきた。よしっ、あのブイまで行って休もう、と沖へ向っていった。

水が青くきれいでそこは冷たかった。さよりのような透明な魚が群れて腹の下を横切っていった。近くに見えていたが、ブイまでは相当な距離だ。深い。五尋いっぴちぐらいはあろう。泳ぎつくと両腕をふるわせてはい上った。これはだいぶ沖だ。赤旗区域内に二つ三つ浮いているブイより遙かに沖に出ている。着いてすぐ、いきなりこんなところまで泳いで、少々無暴だ、と反省しながら、呼吸を整えていると、このブイへ向って達者に泳いでくる者がいる。確かな平泳ぎだ。

白いゴム帽子をすっぱりかぶっている。女じゃないか。女が一人禁止区域で泳いでいる。赤い海水着の肩が見える。どんな女だか顔は見えないが、とにかくあきれた奴だ。近づいてきた。丸顔だ。よ

く日焼けしている。海水着は真紅だ。袖口に、とっても腋の下だが、白いレースのフリルがついている。凝った海水着だ。こりゃただの女じゃあるまい。

女は、速水の傍へ泳ぎついて荒い呼吸をしている。一、二回顔を水に浸け丸々と太った手で無造作に拭い、深呼吸をして軽々とブイの上に跳び上り、速水と一メートルほどの間隔を置いて腰を降ろした。大肉体美人である。厚い胸、二本の巨木のような圧倒的な太もも、マック・センネットのベISING・ガールズの中にもこれほど見事な肉体女優はいないぞ、マリー・プレポウの豊満さをもってしても、かなうまい。こりゃ銀座の女給に違いない。

「この水、冷たいね」

速水は気軽に話しかけた。

「あら、そうですか？」

「冷たいよ」

「もっと温かいところ、ございますか」

「いやにすましこんでますね。よせやい」

「あら、面白いお方」

「いや、普通だよ。誰と来てんの？ 一人かい」

「一人」

「嘘つけ。分ってるよ」

と会話を交わしてみると、愛くるしい顔だ。目は細く少し吊り上ってはいるが、その肉体に似ず童顔だ。鼻がいい形だ。頬は含み綿でもしているかのようにふくれあがって果実のように赤く、その中

央におちよぼ口がついている。こりゃ天平時代だ。

「いつも、ここで泳いでおいで？」

女がたずねた。

「僕？ 今日初めてなんだ」

「初めて？」

「そう。鎌倉でなんか泳いだことないよ。いつも混んでるっていうからね。でもここはいいね。人が少なくてらくちんだ」

「ホホホホ。ら、く、ち、んってなんですか」

いやだなあ。この女、妙な笑い方をしやがる。らくちん知らねえのかい。

「らくちんって、らくちんさ」

「ホホホホ」

この時、いつの間にか速水らの前へ、中年の、がっしりした骨格の男が、観海流の抜き手を切って近づいていた。鼻下に髭をたくわえている。眼を鋭く速水に据えて、いきせき切って抜き手を切っている。速水は、その眼から敵意を感じた。ナーンだ。こんな男と来ているのか。男が二人の中に割ってはいり、ブイに手をかけた時、速水は天平時代に片目を閉じて見せ、

「あばよ」

といって水へ跳び込んだ。こんな香具師^やみたいな男にやきもちやかれてたまるか。

「ホホホホ」

女は速水の「あばよ」に、また、天平時代の笑いで応えて、つづいて跳び込んだ。そしてすぐ

傍に並んで泳ぎ出した。髯の旦那は置き去りである。

泳ぎながら速水は、

「いんですか。逃げ出して」

「え、なんですか」

女は近寄ってから、

「いんです。アハハハハ」

今度は女給らしく笑った。お腹の底から笑った。旦那はブイに上らず、この畜生ッ、といった闘志を燃やして追ってきた。女は泳ぎの達人だ。今度は速水と同じのしで大きく水を蹴ってくる。速水はすべて右ききのだが、のしだけはぎっちょなのである。教わったとき、水泳の師範と向いあって泳いだため、ぎっちょになった。今、女と並んで泳いでみると、このぎっちょが甚だ具合がよい。向い合って顔を見ながら泳げる。

この女給、妙に人なつこいではないか。旦那と来ているくせに、人恋しいまなざしをする。そりやそうだろう。いくら金を目あてとはいえ、あの、髯の中年男じゃ淋しかろ。

「何処に泊ってんの」

「お成町」

「というと」

「駅のすぐ近くよ」

「駅裏の宿屋か」

「ホホホホ」

「やだなあ、からかうなよ。東京からかい」

「はい」

「銀座だろ」

「常盤松ときわまつです」

「常盤松って、何んだい」

「観海流は充分遅れている。もはや目は血走って、必死に追ってくる。」

「旦那は死にもの狂いだよ」

「ア、ハハハハ」

もう背が立つだろう、と速水は右足を降ろしてみた。立った。傍に岸へ向つての最後の赤旗が立っていた。やれやれ、疲れた。だが、この女、悪くないぞ。石光や軟派の磯田に、「どうだい、俺はもう女を一匹拾ったぞ」といつてやろう。そうだ。あいつらは何処にいるんだろうか。浜を見た。

そのあたりは、混雑の中心から離れて人影がまばらである。二、三組が砂地ところがっている。その中を、こっちへ向って走ってくる者がいる。四人の男。立ち止って叫んでいる。

「はーやみのバカヤロー。バカヤロー。は、や、みー、早くこっちへこいッ。こっちだッ」

居た、居た。黒川たちだ。速水は水を蹴立てながらゆっくり斜めに歩いていった。女は、と振り返ってみると、旗の境界線のあたりまでついてきて立ち止まっている。悲しそうに速水を見送っている。速水は、手を高く揚げてさし招いたが、泣き出しそんな顔をして動こうともしない。

石光と黒川が水の中を走ってきて、速水の手を強く引っ張った。

「逃げろよッ、バカ。早く逃げるんだ」

「なんでだよ」

「宮さんだよ。早く。早く」

その時、彼らの背後で荒い呼吸と大声とを聞いた。